

Title	日本画家・谷口富美枝の思い出、足跡をたどって： 船田富士男氏に聞く
Author(s)	北原, 恵
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2017, 51, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/71405">https://hdl.handle.net/11094/71405</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 日本画家・谷口富美枝の思い出、足跡をたどって

——船田富士男氏に聞く——

北原 恵

キーワード：谷口仙花／船田玉樹／日本画／南加文芸／オーラルヒストリー

谷口富美枝（1910-2001年）は、1930年代、川端龍子の主宰する青龍社に属し、そのモダンな女性像によって画壇で注目を浴びた女性画家だった。だが、夫・船田玉樹とともに共に疎開し、敗戦後離婚。一度は浦和の実家に戻ってきたものの、1955年に渡米しアメリカで生涯を終えた。玉樹の元で育った長男・船田富士男氏は、最近まで母親の消息を知らなかったが、相次いで戦前描いた作品が発見されたことから、母の生涯を調べ始めた。その調査が精緻で論理的なことに私は驚いたことがある。谷口富美枝についてはすでにまとめたことがあるが<sup>1)</sup>、その後も新たな資料が次々と見つかっている。そこで、本稿では、船田富士男氏にうかがった母の足跡を探ることになった経緯や、幼い頃の母親との思い出を紹介する<sup>2)</sup>。これまで文書資料では知ることのできなかった貴重な体験と記憶を語ってくださった。

## (1) 母・谷口富美枝の足跡を探して

### ① 自ら母の消息を調べることもなく

北) お母さまのことを調べるようになったきっかけや思い出について、お話をうかがいたいと思います。

船) 私が生母・富美枝と生き別れたのは、小学校2年生の11月頃です。8歳4か月の時でした。それ以降、まもなく母の顔を忘れてしまったし、どこに住んでいるかもわからない。もちろん手紙をもらったこともないし。両

親とか周りの人から話を聞くこともなかった。自分から母のことを知りたいとか会いたいとか思ったことがなかったんですね。どちらかと言えば自分は捨てられたという思いでした。母の消息がわかったのは、66歳を過ぎてからで、8歳の時に生き別れてから58年という年月が流れていました。それまでに何回か、周りの人を通じて母の消息を知るチャンスはあったかなと思うんです。

そのひとつは、私が大学生の時に画家の浜崎左髪子さん<sup>3)</sup>から、私の写真がほしいと頼まれたときのことです。

北) 何年くらいのことですか？

船) 私が大学生の時だから、1966年頃です。浜崎さんは、父と同じ広島出身、出生年も同じで、いっしょにグループ展を開催する時もあるなど父とは比較的交流があったんですが、その浜崎さんの友人がロサンゼルスに行った時、偶然、私の母と出会ったらしいんです。話によれば、夜、一人で服作りの仕事をしている中年の婦人がいて、その女性が私の弟に似ていて、なんとなく気になり話しかけてみると船田玉樹の元妻だったことが分かったそうです。そして、二人で共に故郷を離れた寂しさから涙したそうです。その時、母は浜崎さんの友人を通して、子どもの写真を入手してほしいと頼んだのです。それで、私と弟の写真を浜崎さんにさし上げたことがあります。

北) そのとき浜崎さんのお友だちは、お母さまの住所を知ったわけですね。

船) ええ。母が恋しい、会いたいと言うのだったら、浜崎さんに頼めば住所が分かるわけだし、大学生にもなっていれば手紙も出せるわけだけど、その気にはならなかった。

その次は32歳の時ですね。呉出身で戦後十代の頃に父の弟子だった人で母を知っている方が川崎におられ、家に遊びに行きました。そのとき、母の弟の住所を紙に書いて教えてくれたんです。その時まで私は母に弟がいたことを知りませんでした。大阪府の住所でしたが、すぐには連絡を取らず、しばらく経って連絡したいと思ったときには、住所を書いた紙を紛失してしまっていました。住所を頂いた方に再度連絡して聞き直すのも恥ずかしく、図書

館で該地域の電話番号を調べてみると谷口姓が何百もあって諦めました。そして三回目は父が亡くなったときの葬儀で、父の妹（叔母）の娘さん（従妹）に会ったときです。従妹の方から米国の母の話を出してきました。叔母は、母の理解者の一人で、母とずっと文通していたんです。1976年に叔母が亡くなって以降は、叔母に代わって従妹が手紙を出していたけど、まもなく（1980年頃か）向こうから手紙が来なくなったとのことでした。それで、母は亡くなったんだ、父よりも早く亡くなったんだ、とってしまったんです。

その後、従妹から叔母が受け取った手紙と、雑誌『南加文芸』<sup>4)</sup>（18号、1974年）が送られてきました。手紙の中には、母自身が香月瓔子（かずきようこ）というペンネームで、「お針子たち」という創作を投稿していると書いてありました。

母の消息が知れたかったら、南加文芸社の住所に手紙を出して問い合わせすればよかったのですが、私は英語が不得意でおっくうだったし…。でも、私はパソコン通信が得意だったので、当時加入していたパソコン通信のASAHI-Netにあった南カリフォルニアの日系人コミュニティのための掲示板を利用しました。この掲示板で尋ねてみたところ、『南加文芸』は1985年に廃刊したことが分かりました。それで止めたんです。

北) 『南加文芸』が廃刊になったことを知り、調べるのを止めたと。

船) はい。1992年のことですね。そのとき母はまだ生きていたので、もしかしたら会えたかもしれないのに。母はもう亡くなったと思っていたので、それ以上調べる気も起らなかったのです。

北) 谷口家とは付き合いがなかったのですか？

船) ええ、全くなかったですね。

北) おじいさまの谷口徳次郎さんが亡くなったときにも連絡は？

船) ないです。私の方から谷口家のことを調べることもできたと思うのですがやらなかった…。

北) それは、遠慮とかあったんですか？ 新しいお母さまへの？

船) うーん。最近になって母が当時呉で親しかった人に絵をあげたという話を聞いたけれど、絵をもらっている人達は私に母の絵を持っていることは一切教えてくれませんでした。みんな父に遠慮していたのかもしれないね。そういう状態でずっときました。

その後、ホームページを検索していて目黒の雅叙園美術館に母の《高原に展く》(1937年)という屏風絵があることを知りました。いつか美術館に行こうと思っているうちに2001年に美術館が閉館して、母の絵を見ることはできなくなりました。

北) 《高原に展く》はカンザス大学のスペンサー美術館が所蔵しており、アメリカでも谷口富美枝への関心が出てきました。またこの屏風の図柄は掛軸として親戚が大切に保管しておられたこともわかりましたね【図版1】

船) ええ。そして2011年1月、東京近代美術館で「日本画」の前衛1938-1949」展が開催され、そこで母が歷程美術協会の三人のメンバー(岩橋英遠、丸木位里、船田玉樹)と一緒に描いた寄せ書きを初めて見ました。この展覧会をきっかけに、父・玉樹の絵が再評価されるようになったんですが、母についてはよくわからないままで…。

## ② 谷口仙花の作品発見をきっかけに

北) それはどうして、調べることに？

船) 2012年1月31日、呉市の個人宅で船田玉樹と谷口仙花の絵が発見された記事が、中国新聞に掲載されたんですけど。その夜、絵の所有者の方(小中高の同級生でもある)から電話がありました。その方のお父様が持っておられた私の父と母の絵を呉市美術館に寄託し、そのことが新聞記事になったこと、新聞記者の方が私の母の消息を知りたがっていることを伝えてくれました。

北) ご本人から電話があったのですか。

船) ええ、連絡先を色々聞いて調べて、わざわざ私に電話くださったんです。それをきっかけに母の消息を探し始めました。

唯一の手がかりは『南加文芸』だけだったんですが、日系人社会に詳しい情報源としてロサンゼルス『羅府新報』という日系人向けの新聞社にたどり着きました。そこに南加文芸のことなども加えて問い合わせのメールをしたところ、「新聞のコラムを書いている人が元『南加文芸』の同人だったから、何か分かるかもしれませんね」と連絡先を教えてくださいました。その後は中国新聞社の担当記者の方が精力的に調査してくださり、母が2001年に亡くなったこと、さまざまな関係者の存在がわかり、これらの人たちを通して母の晩年の歩みが分かってきました。

母の消息を知る最初のきっかけになった山中真知子さん<sup>5)</sup>は2008年に母の思い出を新聞のコラムに書いていました。「故谷口ふみえは、私たち南加文芸の仲間であった…七年前に享年九十一であった。」<sup>6)</sup>と。そして母がロサンゼルス友人に託していた遺品があることもわかりました。遺品を預けていたのは母の友人でHさんという剣舞家なんですけど、境遇や趣味も舞踊系で似ているということで、仲がよかったです。その後、Hさんも亡くなりましたが、遺族が遺品を大事に保管、その遺族が日本に帰省したときに東京でお会いし母の遺品を受け取ることができました。

北) 遺品というのは、何だったんですか？

船) 14点の日本画、能についてまとめた自作の冊子『花扇』2巻、『小鼓』の楽譜、能の新聞記事切り抜き、能についての自筆メモとかです。

つまり、2012年1月31日までは、母についての情報は全く知らないし、調べようとも思わなかったし、全く頭の中になかったんですね。でもこの日電話を頂いてから色々と調べ始めて、この年の4月には、Hさんの遺族のOさんが、アメリカから遺品を持ってきてくださって受け取ることができたんです。

北) その遺品をご覧になったとき、どう思われましたか？

船) それまで色紙くらいしか母の絵を見たことがなかったのです。初めてでした。ここにありますが。母が子どものために描いた色紙です。

北) それは呉の家にあったのですか？

船) いえ。私が33歳の頃（1978年）、濱本さんから頂いたんです。濱本さ

んは浦和在住の方で、日本を発つ前に母が、「富士男が大人になったら渡して」と言って、絵などを預けたそうなんです。

北) 濱本さんはどういうご関係だったんですか？

船) 父の弟子です。濱本さんは呉出身で東京の美術学校に進学、浦和に住んで、谷口家の実家近くの中学校で美術の先生をしていました。私は児童文学に関心があったんですが、浦和で児童文学の講座があり出席するのを兼ねて濱本さんの家を訪問、泊めていただきました。その時、母が託した荷物を受け取ったんです。

北) 荷物には、色紙のほかにも何かあったのですか？

船) 荷物の中には、15枚の白黒写真、私の小学校1、2年頃の作文・日記・絵、それに芳名録（寄せ書き）がありました。私はその時に受け取った写真を通して、やっと母の顔を知りました。[色紙の絵を眺めながら]

北) この絵は金太郎【図版2】。子どもが生まれて初節句のお祝いに描かれたんでしょうね。小さい色紙しか見たことがなかったのが、Oさんが持参された遺品で、初めて大きな日本画をご覧になったわけですね【図版3～6】。

船) はい。『花扇』とこれらの日本画は、母が最後まで手元に置いていたようです。きっと日本から持参したんだと思います。母が叔母に宛てた手紙の中に水彩画や油絵を描いているとはありましたが、日本画を描いているというのはなかったですから。ずっと持っていたのは、特に思い入れがあったのか。

北) それらを見た時、どう思われましたか？

船) [絵を見ながら] これなんか、私にそっくりだと思いました【図版7】。

北) 敗戦後、お母さまは生活費を稼ぐために、『四國春秋』という雑誌に挿絵や文章を書かれていて、そこにも富士男さんとそっくりの赤ん坊や子どもが登場します。この絵の男の子も富士男さんに間違いないと思います。

船) こういうのを見ると涙が出ますね…。

北) 男の子はリングを持っているんですか。

船) ええ。この絵が一番好きです。あとは、『花扇』に名前が出ている人が健在か調べたり。ネット経由で死亡証明書を手入したり、母がエキストラと

して出演した映画「Bubble Boy」（2001年、ブレア・ヘイズ監督）のビデオをネットで購入したりして。

今年（2017年）初めには、広島県福山市の大島能楽堂に母の能画があるかどうか、尋ねてみました。母は1942年に喜多流に入門、戦時中に関わらず能にのめり込んでいましたが、呉に来てからも福山まで能を習いに行っていたそうなんです。大島能楽堂に手紙を出して尋ねたところ、仙花の能画8点が見つかったんです<sup>7)</sup>。大島家3代目の大島久見さんは、仙花と同じ頃に東京で修業していたそうで、絵は3代目の遺品の中にありました。

北) 大島能楽堂では仙花の絵だということはわかっていたんですね？

船) いや、「仙花」だけだったから、誰の絵かわからなかったそうです。雪の寒いなか、呉の学芸員と一緒に見に行きました。だからホットなんですよ。

北) 今も次々と作品が見つかっている。最近、《夏日幻想》も発見されたと聞きましたが、ご覧になりましたか？

船) まだ見てないんです。父の弟子で呉在住の絵描きさんが持っていたそうです。この方も私が幼い頃から知っている方なんです。

北) 今、一番、何をお知りになりたいですか？

船) やはり、母の有名な作品とか、どこにあるのか知りたいです。

北) 所在不明の絵も多いですね。

船) 山中真知子さんの記事で、ロサンゼルス日本人町にある高野山別院に絵を3点、寄付したこともわかりました【図版8】。高野山別院では毎年、広島・長崎原爆犠牲者の追悼法要があるんですが、母の没後、平和の祈りを込めて原由実さんが寄贈されたそうです。

## (2) 幼い頃の母との思い出——1945～1953年

### ① 呉の船田家で

北) では、お母さまと暮らしておられた頃の思い出などをおうかがいしたいと思います。船田さんがお生まれになったのは？



船) 私は、1945年8月3日、呉の海軍病院で生まれました。広島原爆投下の3日前です。呉は広島から直線距離で25キロくらい離れているんですけど、病院の窓から原子雲が見えた、母が私に言っていたのを覚えています。

北) 谷口ふみえさんが書いた小説「グレイハウンド・パス」は、富士男さんの出産のシーンから始っています<sup>8)</sup>。だから、富士男さんを生んだということは、富美枝さんにとってすごく重要なことだったんじゃないかと思います。船田さんはどんなお子さんだったんですか？

船) 赤ちゃんの時は胃腸が弱く、生きるか死ぬかだったこともあったそうです。母乳が足りなくて、父方の親戚で子どものいた人からお乳をもらったそうです。からだも小さく、泣き虫で、運動神経も弱く、ボールを投げて同じ年の女の子と同じ位しか飛ばなかった。吃音があり、寝小便の習慣もあったけど、母は叱ることもありませんでした【図版9】。

その頃は、水道もガスもなく、風呂を焚くのも、ご飯を炊くのも大変。手押しポンプで井戸から水を汲み、全て薪を燃料にしていました。

北) それは覚えておられるんですか？

船) ええ、覚えてますね。その後小学校4年頃になると、水道が開通、フロはリフォームして新しくなり、調理にはプロパンガスや灯油を使うようになりました。でも、昭和28年までは昔のやり方でしたから母は家事が大変だったと思います。最寄りの駅は国鉄の広駅と安芸阿賀駅だったんですが、当時バスは無く、どちらも歩いて45分位もかかるので、旅行も買物も医者にかかるのも大変でした。浦和の母の実家跡に行ったとき、駅から歩いて10分くらいの所だったんで、その差にびっくりしました。

北) 保育園に通ってらっしゃったんですか？

船) 保育園はね、最初の1カ月か2カ月くらいで麻疹になって長く休み、辞めてしまいました。小学校に入学しても病気がちで、ずるずると休みが続き、学校から養護学級に移った方がいいと勧められたこともありました。家では猫を飼っていて、よく猫と遊びました。飼っていた猫が庭に居るとき、母がニコニコしながら、「This is a cat.」という英語を教えてくださいました。私が最

初に覚えた英語です。母の顔は忘れてもその時の英語は覚えていました。

北) お母さまが家で絵を描いているのは、ご覧になりましたか？

船) 見た記憶がなかったですね。料理をしているか、裁縫をしているか。普通の主婦がやることをやってる以外は、能の練習をしたり、謡をしたり。母が画家であるという意識はなく、能の舞の先生といった感じでした。近所の女の子に舞を教えていたし、年に1回ほど家の画室(板の間)を舞台に使って能の会を開いていました。その日は能をやっている人が7-8人集まっていました。鼓もあったし、能の舞をする後ろで謡を謡う人の中には袴を着ていた人もいました。私自身も母から能の舞を少し教わった記憶があります。覚えているのは、扇を片手で開くこと。

一度だけ母と汽車に乗って他の町の能舞台に行ったことがあるんです。その時、舞台は公園の中にあり、確か岡山だと言っていました。のちに聞いたところでは、母は福山まで能を習いに行ったというので、福山だったかもしれないけど、福山の犬島能楽堂は公園の中ではないので、岡山の後楽園の中の能舞台だったんじゃないでしょうか。今から思えば、子どももいて、貧乏だった中でよく能が続けられたものだと思います。絵を描いているところは見た記憶がないけど、もしかしたら、集中するために、子どものいないときに描いていたのかもしれないね。当時私は夜8時頃には寝てましたから。

北) 絵を制作されているのを見たことがなかったんですね？

船) はい。絵ではありませんが、母は布に刺繍して作品を作り、何かの展覧会に出品して入賞しました。空を飛ぶ天女の刺繍だったことを覚えています。

北) 子どもに対してはどんなお母さまでしたか？

船) 優しくかったですね。怒られた記憶は全くありません。感情的になることはなく、穏やかな人でした。失敗しても、引きこもりがちな子供であっても、叩き出すとかはありませんでした。暖かく見守る感じだったんじゃないでしょうかね。

北) 一緒に遊ばれたんですか？

船) うーん、覚えてないです。5歳の頃、私が描いた油絵が3作ほど残って

います。父親が日付と年齢を書いてくれており、昭和25年のことでした。父と母がそばにいて油絵を描いたけど、体力がなくて疲れてしまったことを覚えています。

北) 呉では、どなたと一緒に暮らしておられたんですか？

船) 父親がいることもあったけど、時々いなくなったりして。母、弟と3人で食べて寝てたりとか。ある日、朝起きると、父が酔っぱらって縁側に寝ていた。おそらく夜中にタクシーで帰ってきて寝ていたんでしょうか。母は何も言わないでじっと父を見ていたことを覚えています。

こんな母とピクニックして近所の神社の下で食事をした記憶があります。母は弁当箱がなかったんでしょうか。茶碗にご飯とおかずを入れ、上に皿を被せて弁当箱代わりにして、ニコニコしながら食べていました。

北) じゃあ、富美枝さんが家のことは全部切り盛りされていたんですね。

船) というか、お金がなかったんです。収入はどうだったか、わかりません。だから粗末なものを食べていた気がするんです。新しい母は、美味しくするための工夫をよくやっていた。手作りの餃子を作ったりとか。私は食べることがなによりも好きだから、新しい母の料理に喜んでいた。前の母のがあまり美味しくなかったんで。美味しければそれでよしと。

北) 敗戦直後はモノがない時代だから無理もないでしょう。お父さまが帰られないときには文句を言っておられたんですか？

船) いや、あまり文句を言ってなかったです。しょうがないと思ってたんでしょう。母は父親との間に問題が生じてても、子どもの前では悲しんだり、言い争いをするようなことはなかったですね。父親は酒を飲むのが好きで、酒で憂さを晴らしたりとか。

北) お家の中でもお酒を飲まれてたんですか。

船) 父は家の中では酒に溺れることはなかったですが。気に入らないことがあるとどこかに行ってしまう、しばらく帰ってこない。子どもはあんまり分かんなくて。一番苦労したのは、今の母でしょうかね。37年連れ添ったから。

北) 大変ですね。

船) だから、一緒に東京に行って、やり直そうと思っていたんじゃないでしょうか、母は。

北) どうしてお父さまは呉に残られたんでしょうか？

船) 東京で画家として成功して絵がよく売れるようになって、自分が描きたい絵が描けなくなることがいやだったようです。「孤高の画家」とか、東京だとできないけど、田舎だからできたんじゃないでしょうか。母は父と一緒に関東に戻りやり直すことも考えていたみたいですが。

北) でも、結局無理だったんですね。

船) ええ。二人が結婚の時も、徳次郎さんからは反対されていたみたいです。

## ② 浦和の実家へ

船) 私が弟と浦和の実家にいた期間は4か月ほどでした。

北) 何か覚えておられることがありますか？

船) 浦和で過ごした昭和28年は、日本で初めてテレビ放送が始まった年で、東京の蕎麦屋で私は生まれて初めてテレビを見ました。浦和で通っていた高砂小学校の秋の文化祭では、テレビが公開されていました。

北) 浦和の実家での家族は？

船) 祖父の徳次郎は、昔、新聞社に勤めていました。写真部に。穏やかな人だったけど、あまり話しかけてはきませんでしたね。祖父が自分で描いた絵を見せてくれたことがあります。それは上野駅近くに住む浮浪者たちが地面に寝ている姿でした。

祖母のセイは少し厳しい人で、私のお箸の持ち方を矯正してくれました。セイは娘時代に上村松園から絵を習っていたそうです。戦前、母は上村松園についてこんなことも書いています。「…松園先生から丁寧な技巧を教つて来てゐる母は私の仕事を見て「こんな乱暴なやり方でも絵になるのかね」と時代の差を見るかのようにあきれてゐる始末だつた…」<sup>9,10)</sup> と。でも、セイさんがどんな絵を描いていたのかはわかりません。

北) お母さまは？

船) 母は浦和の実家ではいつも内職をしていました。布で作るアクセサリーの製作。実家では、年老いた両親と母の姉の3人が暮らしていて、外で金を稼ぐ人は誰もいませんでした。今思えば、母の実家も豊かではなく、母としても少しでもお金を稼ぐ必要があったのでしょう。結婚先から戻ってきて肩身の狭い思いもあったんでしょうね。

北) 富士男さんは、絵とかよく描いておられたんですか？

船) ええ。これは小学校2年の夏休みに作った自作の絵本です。

北) 表紙に『おもしろブック』と書いてあります。

船) 母が和紙で背表紙をつけて糸で綴じ、一冊にまとめてくれたんでしょうね。今、気が付いたんですが、誰が水彩で色をつけてくれたんでしょうか、やっぱり母でしょうね。

北) 富美枝さんの小説、「グレイハウンド・パス (三)」のなかに、子どもたちが車の絵を描くシーンがありますが、それを思い出しました。[絵日記を読みながら]、「お母さんはよそへお出かけになりました。留守にセミを入れる袋を作ってもらいました。嬉しいでした。早く上手になってとりたいです。」夏の蝉取りの話ですね。「大宮こうえんに行きました…。」

船) それは覚えていないですね。デパートの食堂で国旗の付いたお子様ランチを食べたことは覚えています。母は精いっぱい子どもに喜びを与えようとしたんだと思います。『おもしろブック』には想像して描いた絵もあります。スキーなんかやることがないのに絵に描いてますが、雑誌や絵本を見て形を覚えて描いたんだと思います。でも、私は浦和にいた数か月の間からだが丈夫になり、それまでの夜尿症もピタリと止まり、病気にもかかりにくくなりました。

### ③ 再び呉に戻る

北) 1953年に谷口富美枝さんは子どもを連れて浦和の実家に戻りましたが、4か月で呉に子どもだけ帰されました。どうしてだったんですか？

船) 初めは自分が育てて、大学まで行かせようと思ってたみたいですが。船田家の方が返せと。やっぱり、母は内職しているくらいだからお金がなかったし。父の方は跡取りが欲しかったんでしょうね。

北) で、数か月で呉に戻られたわけですが…。その時のことを覚えておられますか？

船) うん。橋の袂で…。弟と私が呉の家に連れ戻されることになって、11月、母が家の近くまで送ってくれたんです。広町の市街地から歩いてきて大広に入るには黒瀬川にかかる大広橋を渡る必要があったんですが、母は、「これから先は二人で行きなさい」と言って、二人が橋を渡り終わるまで橋のたもとにいました。渡り終わったとき、母が手を振ってくれました。その後、川の堤防の上の道を北の方に向かって歩いて行きました。弟と家の方に歩いていたら、新しい母と父が歩いて来るのに出会いました。偶然だったのか、知っていたのか、わからないけど。「新しいお母さんがいるから、心配なくていいよ」って、その前に母が言っていました。

ずっとあとに大人になって聞いた話では、その日、母は広町の北の方にあった知人の家に立ち寄り、一晩泣き明かしたそうです。

北) お辛かったでしょうね、お母さまは。じゃあ、橋の袂で別れてから以降の記憶はないのですか？

船) ええ。家に母の写真は全くなくて、いつしか生母の顔も声も忘れてしまいました。最近になって育ての母から聞きましたが、幼い頃、私が別れた母を慕って寂しそうにしていたことがなかったのを不思議に思ったそうです。

北) その後は、富士男さんはどうされたんですか？

船) 広島大学の工学部に入学しました。中高は美術部にも入っていたし、芸術に全く興味がなかったわけでもないんですけど。高校の頃、化学に興味を持って、化学部の部長をやったりしていたし、子どものころから発明・工夫が好きだったんです。父の大工仕事もよく手伝っていました。

北) ものを創造するのがお好きだったんですね。

船) 船田家の祖父が職人だったんです。これ、祖父の写真です。

北) すごく恰幅のいい方ですね。谷口フミエさんの小説の中には、おじいさまが登場して、戦争中、「もうすぐ日本は戦争に負ける」と言ったため、特高に捕まったという話がありますが、事実だったんですか？

船) ええ、事実です。

北) そして广大を卒業してからは？

船) 石油会社に入社し、工場の運転、研究、情報システムなど技術畑の仕事をやってきました。

北) お父さまもお母さまも丸木位里・丸木俊さんとは戦前からのお友だちだったと思うんですが、大人になってから会われたことはありますか？

船) 何回かあります。展覧会場で会ったこともあるし、丸木美術館には何度か行って、位里さんや俊さんとも会ったことがあります。29歳の時（1974年）、父や妹と一緒に丸木さんの家を訪問する機会がありました【図版10】。そのとき、まだ出版する前の大道あやさんの絵本原画「ねこのごんごん」を見せていただいて感動しました。そんなこともあって絵本に関心を持つようになり、自分でも創作絵本を作ってみました。30歳の頃、田島征三や赤羽末吉が講師でやってきた絵本講座が比叡山であり、参加しました。

北) 丸木夫妻の場合は、戦後、「原爆の図」シリーズを描き、平和運動に携われましたが、お母さまの場合は、平和運動には関わらなかったのでしょうか？

船) 丸木さんたちは、進駐軍がいた時代から活動しておられますからね。

北) 丸木さんたちと富美枝さんは仲がよかったんですか？自由に色んなことにチャレンジするのは似ているけど、戦争に対して考え方が違ったかもしれないですね。女流美術家奉公隊と一緒に活動していた長谷川春子は、戦後は女性画家のグループとも距離を置いていました。

戦後、中央画壇で活躍していた画家たちが、呉の船田玉樹と谷口仙花に上京を願う寄せ書きをしたそうですね。

船) 丸木位里や棟方志功、岩橋英遠とか…。

北) 長谷川春子の名前もありました。でも、玉樹は呉に留まり、仙花だけ

が関東に戻った。そして浦和で個展を開いたり、女性だけのグループ展「七彩会」展を開くなど、精力的に活動しています。それなのに、お見合いで日系人と結婚し突然渡米してしまったのはどうしてだったのでしょうか？

船) やっぱり広島にいて長い空白があったし。夫が足かせになってお金も時間もなかっただろう。思ったようにはうまくいかなかったのか、家族に反対されたのか。実家で女性の画塾を開こうと思ったが、徳次郎さんに反対されたと聞きました。日本にいたら、子どものことが忘れられなくて辛いので、アメリカに行ったと言った人もいましたが…。

### (3) 母が残したもの

北) 8歳4カ月でお別れになるまでのことを語ってください、ありがとうございました。幼かった船田さんにとっては覚えておられるのはわずかの期間だったと思います。60歳を過ぎてから探し始めたお母さまの足跡。船田さんに何を残されたのでしょうか？

船) 色々とありますね。

就職して山口県の工場勤務のとき、会社に能のクラブがあって。母が能をやっていたので懐かしくて入りました。千葉の研究所に移ってからは喜多流のクラブがあったので、また入りました。教えて下さった先生が、谷口仙花を知っているとおっしゃったのでびっくりしました。

浦和の実家に滞在中、母に近所の教会の日曜学校に連れて行ってもらったことがあるんですが、30歳の時、知人に誘われ教会に行くようになり、現在に至っています。子どもの時に日曜学校に行ったことがあったからですね。母が米国から日本の知人に宛てた手紙の中に教会に通っているという内容のものもあります。母の両親は明治時代からのクリスチャンだったことを最近になって知りました。

また母は文芸誌や新聞に投稿したり、花扇という手書きの本を作ったりしています。それを直接見たわけじゃないけど、私自身若い時から文章を書いた



り、仲間と児童文学誌を作ったり、会社でも社内誌とか編集したりして。定年後はNPOで本づくりをしてきたし…。これも知らないところで、母の影響があったのかもしれないですね。

北) 今日はありがとうございました。

[注]

- 1) 北原恵「“モダン”と“伝統”を生きた日本画家・谷口富美枝(1910-2001年)」『待兼山論叢』第48号日本学篇、大阪大学文学研究科、2014年
- 2) 船田富士男氏への聞き取り調査は、2017年8月22日、群馬県太田市の自宅にて行った。その他、船田氏がインタビューに際して準備したメモ書き「幼い日の母富美枝の記憶、足跡をたどって」(2017年8月22日版)も随時参照した。インタビューに快く応じ、惜しみなく資料を提供してくださった船田氏に感謝したい。
- 3) 浜崎左髪子(1912-1989年)、ハワイ・ヒロ市生、広島画壇を代表する日本画家のひとり。船田玉樹、丸木位里、鬚光、山路商らと交流があった。
- 4) 『南加文芸』は、1965年から1985年までロサンゼルスで発行された日本語による文芸同人誌。
- 5) 山中真知子(1931-)、舞鶴市生、1957年帰米二世・山中稔と結婚、渡米。カリフォルニア州パサデナで専業主婦として暮らすかたわら創作活動をし、『南加文芸』の編集委員を務めた。
- 6) 山中真知子「木曜随想：原爆の日」『羅府新報』2008年8月21日、11面。
- 7) 「谷口仙花の画 大島能楽堂に」『中国新聞』2017年4月4日
- 8) 谷口ふみえ「グレイハンド・バス(1)」『南加文芸』1967年9月
- 9) 谷口富美枝「松園女史のこと」『塔影』第16巻10号、1940年10月

(文字研究科教授)

【図版】



▲図版 1. 谷口富美枝「高原に展く」1937年

▲図版 2. 谷口仙花「初節句金太郎」1946年頃



▲図版 3～6. 米国から帰った谷口富美枝の日本画（着物の女性像、4点）



▲図版 7. 谷口仙花「富士男」1946年頃



▲図版 8. ロサンゼルス高野山米国別院に寄贈された谷口富美枝の作品



▲図版 9. 家族写真、1947-48年頃。左から次男を抱く富美枝、長男・富士男、船田玉樹。



▲図版 10. 丸木位里氏宅の訪問、1974年（左から2番目丸木位里、4番目富士男）

[図版出典・所蔵一覧]

- [図 1] 『美人画にみる風俗 昭和前期』  
目黒雅叙園美術館、1996年
- [図 2] 船田富士男氏所蔵
- [図 3～6] 船田富士男氏所蔵
- [図 7] 船田富士男氏所蔵
- [図 8] 高野山米国別院所蔵
- [図 9] 船田富士男氏所蔵
- [図 10] 船田富士男氏所蔵

## SUMMARY

Tracing the life of Japanese Style Painter, Fumie Taniguchi:  
Interview with Mr Fujio Funada

Megumi KITAHARA

This article concerns a Japanese female painter, Fumie Taniguchi (1910-2001) and attempts to understand her life and artworks by interviewing Mr Fujio Funada, her eldest son. Taniguchi Fumie belonged to the blue dragon company (Seuryu-sha) presided over by Ryushi Kawabata in the 1930s in Tokyo, and her paintings attracted attention in the art because of its modern female images.

Due to exacerbation of WWII, she was evacuated to Kure from Tokyo with her husband, Mr Gyokuju Funada, and gave birth to her son just before the end of WWII. Then she was divorced, took her son with her and return her parents' home in Urawa. In 1955 she left her son behind and migrated to the United States and ended her life in the States.

Mr Fujio Funada was separated from his mother (Fumie Taniguchi) at the age of eight, was raised by his father (Gyokuju Funada) and had little to do with his mother. However, later on, when Taniguchi's picture drawn before WWII was discovered, with this discovery as a starting point, he began to search for her mother's past.

Recently research on Fumie Taniguchi has made rapid progress. This progress was unable to be achieved without enthusiastic and accurate archival research conducted by Mr Fujio Funada. The author of this article has already written about Tomie Taniguchi regarding her pre-WWII paintings (Megumi Kitahara, 2014, "Japanese Painter, Taniguchi Fumie, Living in both 'Modern' and 'Tradition' (1910-2001)", *Machikaneyama-Ronso, Japanese Studies*, no.48, pp.1-25.)

This article provides an in-depth interview record of Mr Funada's memories about his mother and how he began to research his mother. In the interview, he offered details about his family life with his mother before he was separated from her and how he started to trace his mother's footsteps. His narratives about this mother shed light on a different aspect of Taniguchi's life.